

巻頭言

## 敬語研究の将来性について

彭 国躍 (神奈川大学)

### Possibilities of the study of politeness

Guoyue PENG (Kanagawa University)

日本における敬語研究の資料はおびただしい数にのぼっています。これまで言語学関連の雑誌で敬語に因んだ特集もいく度となく刊行されています。今回、わたしたちがあえてこのテーマについて特集したのは、敬語問題はその運用・実践レベルにおいて身近な問題として関心度が高く、その研究・調査レベルにおいて次々と新しい視点や方法が導入され、常に一種の新鮮さが保たれているからです。

敬語研究についての概説は、すでに多くの関連書物や論文で言及されているので、ここでは本特集に関連するいくつかの側面について、管見を述べたいと思います。

#### 1. 理論・方法論の開発

日本における敬語研究は大きな流れとして二つあります。

一つは、松下大三郎 (1901) や山田孝雄 (1924)、時枝誠記 (1939) など 20 世紀初頭から日本語文法論の一環として発展してきたものです。このような伝統的な敬語論は山田孝雄の二分類説から時枝誠記の二類三種説、辻村敏樹の四分類説、宮地裕の五分類説へと展開したように、主に敬語現象を細かく切り刻んで分類し、その具体的な機能の違いを分析する方法が取られていました。しかし、これらの研究およびその延長線上にある敬語研究の諸理論は、あくまでも個別言語としての日本語論に限られるため、近年では他の言語にも適用できる普遍的な視点が欠けているという批判を受けています。

一方、20 世紀後半から Lakoff (1974)、Leech (1983)、Brown and Levinson (1978, 1987) など

によって、英語社会の politeness を基本モデルとしながらすべての言語に通用できるポライトネスの普遍的枠組みが提唱されてきました。それがきっかけで敬語問題は、表現形式だけでなく、表現内容も含めて、言語の基本的な機能——対人関係機能の一環として扱われるようになり、かつて松下大三郎がいう「壮大なる体系に統一されている文法的敬語」の枠を超えて、語彙、構文から談話へと考察の対象が広がり、社会言語学的現象、語用論的現象または社会心理学的現象として幅広く議論されるようになりました。日本における敬語研究のもう一つの流れは、上述の普遍理論の有効性を検証し、それらを発展させようとする動きです。

ところが、個別現象を深く掘り下げるとその結論の適用範囲がおのずと限定されたものになるように、普遍性を追究していくとそこに導き出された原理・原則がより一般化、抽象化する傾向があります。言語の普遍性を求める作業過程で、個々の言語が持つ個性的な面や具体的な言語事実が捨象され、言語表現そのものが持つ構造性が看過されてしまう恐れがあります。現行のポライトネス普遍理論の諸説を見ますと、従来の語彙論的、文法論的敬語研究にインパクトを与え、新しい視点を提供したとは言えますが、日本語の対人関係機能を鮮明に際立たせた従来の敬語理論の代わりにはなっていません。最初からなろうと意図されてもいないかもしれませんが、近年のポライトネス研究と従来の敬語研究との間に、基本的な立場や概念、用語などにおいてほとんど整合性がなく、普遍理論の諸説も、話題人物への待遇的配慮を含めた従来の敬語理論を完全に吸収できる

ほど成熟したとは言えません。

いつしか、宇宙形成に関する「ひも理論」はマクロ現象とミクロ現象を一つの理論で同時に解釈できるところにすばらしさがあるというNHK科学番組の解説のことばに、素人ながら感心したことがあります。敬語、ポライトネスについてのよい普遍理論の開発にも、次元は違うけれども、同じことが言えるのではないかとつくづく思います。

わたしたちは、敬語・ポライトネス現象について、言語学、行動学、社会学、心理学および倫理学などの要素が絡み合った、一筋縄では中々いかないような一種の複雑系として認識し、それについての理論、方法論の開発にもおおらかな批判精神と、百家争鳴のような環境作りが必要ではないかと思っています。

## 2. 歴史言語研究への展開

言語研究史の中で、古代ギリシャの修辞学や中国古典音韻論などのように古代語研究に開発されたさまざまな方法論が近現代語研究に援用されるケースは枚挙にいとまありません。20世紀後半に入ると、現代語研究に、社会言語学、語用論、認知言語学など多くの分野が開拓され、それぞれの中で変異理論、発話行為理論、メタファー理論、関連性理論などさまざまな理論や方法論が開発されています。しかし、これらの新しい理論や方法論を古代言語研究にまで応用しようとする動きはまだ少ないようです。わたしたちは、書記言語のデータ資料に基づいて、古代言語における社会言語学的、語用論的または認知言語学的な諸側面についても探究していく必要があります。

敬語・ポライトネス研究について言えば、わたしたちは新しい視点や方法を導入し、古代言語社会における敬語規範、敬語意識、敬語運用の社会的変異、丁寧さの発話行為、対人関係の認知モデルなどの諸側面を解明し、古代言語における対人関係機能の体系や運用原理を明らかにしていく必要があります。古代中国語の一例を挙げますと、孔子は『春秋』という歴史記録集を書いた時に、さまざまな人物とくに国君など地位の高い人物に対して、ことばの言外の意味を利用して政治的評価と待遇的配慮を巧みに

使い分けていましたが、わたしたちは丁寧さ含意の算出にかかわる語用論的視点や分析法を導入することにより、この「春秋筆法」と称される対人評価法のメカニズムを解明することが可能になります。

日本語に関する敬語の史的研究には質・量ともに世界に誇るものがあります。その研究成果をどうにか日本語論の中にだけ閉じ込めず、それに普遍的な意義を見出す努力が必要です。日本語敬語の史的研究で得られた多くの知見をもっと古い時代の言語資料が残っている古代諸言語の敬語研究に活かすことが、今後の一つの課題になるのではないかと思います。たとえば、古代ペルシャの楔形文字文や古代エジプトの聖書体文字文や古代中国の甲骨文字文、金文などに敬語または敬語的な要素が現われていたのかどうか、あったとしたらどのような形態なのか、研究結果によっては、日本語の敬語起源についての金田一京助の「タブー説」と辻村敏樹の「讃美説」が持つ普遍的な意義が検証される可能性があります。

本当の意味での言語の普遍性は、多言語間の壁を超えると同時に、時代の壁をも超えて普遍的でなければなりません。いま、わたしたちは、現代語研究で開発されたさまざまな理論や方法論を古代語の分析にも応用し、古代言語の敬語・ポライトネス研究に新しい風を吹き込む時期に来ているのではないかと思います。

## 3. 言語教育への応用

言語教育、とくに日本語教育の現場において、敬語の教育は常に切実なテーマとして議論されています。敬語習得の問題点は、よく言われるように、敬語の表現形式ではなく、どのような人間関係にどの程度の待遇表現を使うべきかという社会的運用能力の習得に現われています。そして、適切な敬語運用は、日本社会における人間関係の基本的な捉え方およびそれに対する倫理的評価基準への理解がその前提となっています。この点において、発音や文法の習得とは大きく異なります。発音や文法上の誤用は、スムーズな情報伝達に支障をきたすことはあっても、通常倫理上の責任を問われるようなことはありません。しかし、敬語の誤用、待遇値の過不足は、相手

に不快感を与えると同時に、話者自身も「ぶっきらぼうで失礼」、「慇懃無礼で不親切」などというマイナス評価を受けることになり、深刻な場合には人間関係を壊し、倫理的批判を浴びることになりかねません。

したがって、日本語の敬語・ポライトネスの運用法を習得するためには、日本社会におけるさまざまな倫理・価値判断の基準の習得が必要不可欠になります。たとえば、謝罪行為に関して次のような二つの相反する価値判断が想定されます。

- a 「自分が正しいと思えば、だれに言われようが、謝る必要はない」
- b 「目上の人に言われたら、自分が正しいと思っても取りあえず謝っておく必要がある」

a が日本語学習者の母語社会での一般的な価値観で b が日本社会での一般的な価値観だとすれば、a の価値観を持つ学習者が、b の価値観を習得せずに、日本語の謝罪表現をうまく運用することはほとんど不可能です。他の敬語・ポライトネス表現の習得についても同じで、日本語学習者が母語社会の価値観だけに従えば「なぜ尊敬してもいない人に尊敬語を使わないといけないのか」、「反対意見なのに、なぜはいはいと同調するのか」などと、言語表現や言語行為に対する価値判断の上で抵抗を感じてしまいます。敬語行動の倫理的属性を考えると、敬語教育は人間関係の捉え方に関する価値観の教育をセットにして行う必要があります。

しかし、学習者が成人であれば、母語社会の倫理観、価値観を持つ人格がすでに形成されています。二言語（または多言語）使用は、一貫した価値観を持つ一人格が複数の言語を操ることだという従来の発想に従えば、人格の矛盾を避けるために、謝罪行為の a、b 価値観のように、一方を持つことはもう一方を否定することにならざるを得ません。そして言語教育も学習言語の価値観を押し付けるという歪んだ形で行われる危険性が生じてきます。（かつて植民地時代の言語教育がそのような様相を呈していました。）同一人間（主人格）が複数の言語を操るための多様な価値観を持ちうるためには、言語習得の過程で、言語人格、つまりある言語を操るために

はその言語の内的構造（音韻、文法、語彙など）の外に、その言語社会での基本的な価値観、倫理観や常識などを備えた人格、適切な言語運用を動機付ける心理的根拠の存在を認めるという発想が重要になってきます。二つの言語を文法的に正しくだけではなく、社会的に適切に運用するためには、二つの言語人格の適格な切り替えが必要です。

言語人格という発想法を持つことにより、理論上、a、b のような二つの相反する価値観がそれぞれ異なる言語人格に所管されるため、主人格における価値観の衝突が解消されます。そして外国語教育において、学習者の母語社会の価値観を否定せずに学習言語の文化的、社会的価値観を積極的に導入することができるようになります。

外国語教育の目標は、大きく言えば異文化間の相互理解を促進し、世界平和に資すること、小さく言えば一人一人の学習者がより多くのコミュニケーション手段を身に付け、他文化との接触で受ける誤解やカルチャーショックを軽減させることにあると言えますが、円滑な人間関係の樹立を目指す敬語・ポライトネス教育は、このような目標を達成させるために大きな役割を果たすことが期待されます。

\*\*\*\*\*

今回の特集号「言語の対人関係機能と敬語」で集められた論文は、理論的考察と実証分析、共時論と通時論、現代語と歴史言語、共通語と地域変種、日本語と諸外国語など、その研究方法、視点、時代、対象言語などにおいて実にバラエティーに富んでいます。これは日本における敬語研究の現状をリアルに反映しているのではないかと思います。個々の論文に対する評価は読者の皆さんの「仁智之見」（賢明なご判断）に任せるしかありませんが、この特集により、今後の敬語・ポライトネス研究に一石を投じることになれば、はなはだ幸いに思います。

参考文献

- 井出祥子, 荻野綱男, 川崎晶子, 生田少子 1986 日本人  
とアメリカ人の敬語行動 南雲堂
- 宇佐美まゆみ 2001 談話のポライトネス—ポライトネス  
の談話理論構想 談話のポライトネス 国立国語  
研究所
- 辻村敏樹 1992 敬語論考 明治書院
- 時枝誠記 1939 敬語法及び敬辞法の研究 語文論叢
- 彭国躍 2000 松下文法「待遇」の本質とその理論的可能  
性—「価値の意味論」の枠組み 世界の日本語教  
育 国際交流基金日本語国際センター
- 松下大三郎 1901 日本俗語文典 誠之堂
- 宮地裕 1968 現代敬語の一考察 国語学 第72号 国語  
学会
- 山田孝雄 1924 敬語法の研究 宝文社
- Browm, P. and Levinson, S. 1978 "Universals in  
Language Usage: Politeness Phenomena" In  
Questions and Politeness Formulas. Ed. E. N.  
Goody. Cambridge University Press
- Browm, P. and Levinson, S. 1987 *Politeness: Some  
Universals in Language Usage*. Cambridge  
University Press
- Lakoff, R. 1973 The logic of politeness; or, minding  
your p's and q's in *Papers from the Ninth  
Regional Meeting of the Chicago Linguistic  
Society*, Chicago: Chicago Linguistic Society
- Leech, G. 1983 *Pragmatics* Cambridge University  
Press